

「活物窮理」の四文字が華岡青洲の金言である

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

受付：平成28年4月27日／受理：平成28年9月16日

要旨：仁井田好古は1836年に「華岡青洲墓誌銘」を撰した。彼がその中で「内外合一活物窮理」の八文字を使用して以来、180年間この句が華岡青洲の発した標語とされてきた。しかし、「活物窮理」を含む書は存在するが、「内外合一」を含む書がないこと、青洲の高弟である本間玄調も師の金言を「活物窮理」と明言していることから、青洲の標語は「活物窮理」の四文字の句である。「内外合一」の句はその条件である。両句を結ぶのは「術」である。青洲は「術」の会得のために、自覚して先輩の技を能く観察し習得することを門人に求めた。

キーワード：華岡青洲、仁井田好古、本間玄調、金言、活物窮理

1. はじめに

仁井田好古(1770-1848)の手になる「華岡青洲墓誌銘」¹⁾に「遂唱内外合一活物窮理説(遂に内外合一活物窮理の説を唱える)とあることから、この八字が一体としてあたかも華岡青洲(1760-1835)自身が提唱した標語として考えられた。仁井田が墓誌銘を撰したのは1836年であるから、以来180年もこの説が世間に流布してきたことになる。

「内外合一」の意義を考えると、この語句は「活物窮理」の条件であると見做されることから、青洲自身は目指すべき医療を「内外合一」を含まない「活物窮理」の四文字だけの標語として門人に示したに違いないと筆者は考えている²⁻⁴⁾。本稿ではこの金言に関して文献的考察を加えて自説を補強し、併せてこの金言に深く関連する重要な青洲の言葉も論じたい。

2. 青洲による「内外合一」や「内外合一活物窮理」の書は存在しない

これまで発表された青洲に関する著書や日本医史の著書では、いずれも青洲の医学は標語「内外合一活物窮理」の八文字によって代表されると

している⁵⁻¹¹⁾。これらの著者の主張は上述したように仁井田好古が撰した「華岡青洲墓誌銘」¹⁾中に「内外合一活物窮理」と刻されていることに準拠している。この墓誌銘以前にこの八文字の標語を記した史料はないので、「内外合一」と「活物窮理」の二つの熟語をまとめて八文字の「内外合一活物窮理」の一句を造ったのは仁井田であることは間違いない。

青洲の揮毫した書に「窮理」、「活物窮理」、「医惟在活物窮理」の語句が見出されるものの、標語としての「内外合一」の四文字のみを記した書、あるいは「内外合一」の四文字を含む書は知られていない^{12,13)}。さらに呉がその大著の巻初に青洲の坐像と共に示した青洲の書も「医惟在活物窮理(医は惟活物窮理に在り)の七文字であって「内外合一活物窮理」ではない¹⁴⁾。七文字中の「惟(ただ)」という副詞によって、青洲の目標とする「医」は「活物窮理」の四文字に尽きるということが明確に示されている。もちろん「医惟在内外合一」の書も知られていない。

語義を考慮すると、「内外合一」は「活物窮理」という最終目標を達成するための前提条件であって、これ自体が最終目標ではないことが容易に理解される。つまり「内外合一」をすれば「活物窮

理」の目的を達することが可能になるのであり、逆に「内外合一」をしなければ「活物窮理」は実現できないことになる。つまり「内外合一」はあくまでも条件である。「内外合一」が何を意味するかについても種々考察を要するが、第一義的には内科と外科に代表される複教科目の兼修ということであろう。青洲が「内外」の語を用いる時は文脈によってはそれ以外の意味も込められていると示唆されるが、ここではこの問題に深く立ち入らない¹⁵⁾。

ここで注意しなければならないのは、時代が降るにつれて医学・医療の専門化に伴う弊害が顕著になり、「内外合一」の必要性が増してきたことである。このことはわが国でも広く読まれていた、明の李梴の『医学入門』(1575-6)の中で「小科を専にせんと欲すれば、則ち亦大科を読まざる可からず。外科を専らにせんと欲すれば、亦内科を読まざる可からず。」と指摘されていることである¹⁶⁾。青洲も同様なことを「燈火医談 後篇」の中で、「凡、外科ヲ為サント欲ハ、先内科ヲ精スヘシ。然ラサレハ治術ニ益ナシ。」(句読点一松木)と述べている¹⁷⁾。これに関連した青洲の書「欲療疾病当精其内外、方無古今唯在致其致」¹⁸⁾も知られている。確かに「内外」の二字は使われているが、それは「当に内外に精しかるべし」であって「内外の合一」ではない。また「当に内外に精しかるべし」も「疾病を療する」ための方法、

手段であって最終目的ではない。「方無古今」の句も青洲自身が「燈火医談 後篇」の中で「京師沢典楽子ノ語」と記している¹⁹⁾。したがって、「内外兼修」、「方無古今」の発想は青洲の創始になるものではない。他人の発想を自己の標語として掲げることにはあり得ない。このことから青洲自身は標語として四文字の「内外合一」やこれを含む八文字の「内外合一活物窮理」を掲げたのではないことが容易に推察されるであろう。

以上述べてきたことによって、青洲の標語は「活物窮理」であって「内外合一活物窮理」ではないことが強く示唆される。しかし、これまでに筆者以外にこのことを指摘した人はいない。筆者が「内外合一」は「活物窮理」の前提条件であるとする解釈を発表したのは2006年であるが²⁾、これに対する反論に未だ接していないものの、信憑すべき史料によってさらに自説を補強することも必要なことであろう。

3. 本間玄調と「活物窮理」

水戸の本間玄調(1804-1872)は青洲の高弟の一人で、呉もその著の中で高弟中の第一位に挙げ、門人中最も多くの頁を費やしてその伝を叙した。玄調は出藍の誉れが高く、青洲もなし得なかった大腿切断術を行ったことでも知られている²⁰⁾。

玄調が1859年に上梓した『続瘍科秘録』の巻頭に師青洲から贈られた「活物窮理」の書(図1)²¹⁾



図1 本間玄調の『続瘍科秘録』中の華岡青洲の書「活物窮理」

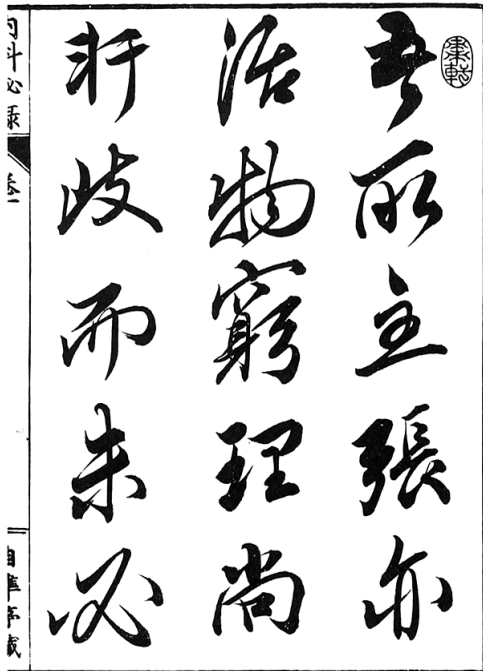


図2 本間玄調の『内科秘録』中の自序の冒頭の部分

を掲げている。「華震」の「華」は「華岡」，「震」は青洲の名である。「活物」の右上に関防印²²⁾を押しているから「活物」の前に文字はなく，この書が「活物」で始まることを示している。したがってこの「活物窮理」は「内外合一」に続くものではなく，独立した四字の熟語となっている。玄調の長男高佐は「序」の中で「右活物窮理は南紀華岡青洲翁の語。往年，翁，家大人の為に書する所なり。」(原漢文)と解説している。青洲が座右の銘としてこの書を玄調に与えたものである。

玄調は1847年の『瘍科秘録』(10巻12冊)，1859年の『続瘍科秘録』(5巻5冊)に引き続いて1864年に『内科秘録』(14巻14冊)を出版した。青洲に心酔していた玄調は『内科秘録』の自序の冒頭を「吾所主張亦活物窮理」(吾主張する所もまた活物窮理)(図2)²³⁾の句で書き出している。師青洲は「活物窮理」を主張したが，自分も師に倣って同じく「活物窮理」を主張するというのである。以上によって，青洲が主張したのは「活物窮理」の四文字であったことが明快に理解される。青洲在世中の門人，そして青洲から親しく「活物窮理」

の書を贈られた本間玄調の言葉であるから千金の重みがある。青洲の金言は四文字の「活物窮理」であることの決定的実証である。

4. 『先哲医話』中の「拙軒」の言

以上の事項に加えて関連する史料を示しておく。浅田宗伯(1815-1894)は幕末から明治期にかけて漢方医として活躍した人物であるが、『先哲医話』を1880年に出版した。「卷上」の末尾は華岡青洲の項である。前言に次のように記している。

医を学ぶ者は宋儒の理を窮める如く，先ず人身道理を格知し，然る後に疾病を審らかにせざれば，極致に至ること能わず。(原漢文)²⁴⁾

体の外面上の「瘡」や「瘍」を治療する外科医も，まず患者身体内部の状態つまり「陰陽虚实」を明らかにして初めて正しい治療が出来るとしたことを述べた後で，上に示した宋時代の儒者たちの考えに敷衍して述べている。浅田はこの条に割注を施して「拙軒」²⁵⁾の次のような言葉を引用している。

拙軒曰く。青洲翁，常に医は惟活物窮理に在りの語を誦して以て後進を教誘す。洋学未だ關かざるの前(原文「未，關之前」)の通りに読む。「前」でなく「時」であれば意味が通ずる。一松木)，早くもこれに着眼す。故に其の截断の術，洋人未だ窮めざる所の理を窮める。翁の瘍科におけるはいわゆる凶南の一人也。(原漢文)²⁶⁾

青洲が常に唱えていた語句は「医は惟活物窮理に在り」であって，「内外合一活物窮理」でなかったことが「拙軒」の言でも理解できる。「洋人未だ窮めざる所の理を窮める。」は，青洲の外科が西洋のそれを凌駕しているとするが，これは全身麻酔術に関しては妥当であろうが，外科一般には当てはまらない。「拙軒」が西洋の外科学の実態に関して十分な知識を持ち合わせていなかったこ

とから来る言葉であり、鎖国という当時の状況を考慮するとこれを一概に誤りとして斥けるのは困難であろう。いずれにせよ、「拙軒」の言によっても青洲の標語は「活物窮理」の四文字であったことが明らかである。

5. 知られていない青洲の言葉 「得與不得在其人」

「内外合一」は「活物窮理」の必要条件であると述べてきたが、青洲はただ医書を読んで知識だけを覚える学習法は無駄で時間を要するとして斥けた。まず患者を実地に診察して、それから症状などについて基本的な書を読んで確認するやり方を重視した。青洲は「燈火医談 後篇」の中で読書について効果的な方法を論じ、先ず患者を観てから医書を読むことを奨め、「患者ト照シ考レハ、自發明スル事多シ。如是ノ数卷ノ書ヲ読、数百人ノ患者ヲ診スレハ、大ニ治療ニ益アリ。且其言ヲ忘却スル事ナシ。」(異体字は常用漢字に直した。句読点—松木)と記している²⁷⁾。

こうして知識は確実に身に付く。しかし、知識を身に付けただけでは実際の医療は出来ない。「内外合一」によって得た知識を巧みに運用する「術」がなければ「活物窮理」を達成できないからである²⁸⁾。「内外合一」を「活物窮理」に導くのは「術」である。青洲は「術」を「口で教えることも出来なければ、文字に書いて示すことも出来ない」とした。越後の佐藤持敬が1861年に編纂した「華岡氏遺書目録」の序に次のように記されている。

青洲翁在時。常語曰『吾術得_レ于心_レ而応_レ于手_レ。口_レ不_レ能_レ言_レ。筆_レ不_レ能_レ書_レ。』(青洲翁在りし時、常に語りて曰く。「吾が術は、心に得て手に応ず。口、言う能わず、筆書く能わず。」²⁹⁾

佐藤持敬(敬齋)が入門したのは1859年であるから、青洲が没してから約四半世紀経っていた。したがって、佐藤は直接青洲の訶咳に接した訳ではない。だから「青洲翁在時」と記した。しかし、青洲の言葉は彼の没後も、後を継いだ四代随賢の

鷺洲(修平, 1805-1866)によってしっかり固守されて門人たちに伝えられていたことが分る。

「術」は言葉で伝えることも出来なければ、文章で示すことも出来ないという。このため「術」を会得することは困難である。これに対して青洲はひたすら先輩の「術」をよく見て学べと諭した。「華岡青洲墓誌銘」には「能視者在_レ領_レ會_レ之_レ耳(能く視る者、之を領会するにあるのみ)とある³⁰⁾。先輩の技をしっかりと観察する者だけが「術」を「領会」つまり「会得」出来るとした。会得するためには一意専心、先輩の実際の医術を観察することの重要性を指摘したのがこの言葉である。俗な表現をすれば「能く視て先輩の技を盗め。」ということになる。どのような心構えで「能く視ればよいのであろうか。墓誌銘中にその答を見出すことはできないが、他の史料中にその回答がある。

青洲が門人に与えた免状に「得與不得在其人 事候得者、此上弥以無懈怠研究可被致候。」(得と不得は其人に在ることに候えば、此上はいよいよ以って懈怠なく研究致さるべく候)とある³¹⁾。自分はすべてを教えたが、その「術」を会得したか、会得しなかったかは「君自身」次第だとしたのである。さらに、その修練は一生続けなければならぬとした。大変厳しい言葉である。青洲は門人の発奮を期待し、門人の自覚を促したのである。免状中のこの「得與不得在其人」の七文字は弟子に対する厳しい言葉であると同時に、「術」の金言と考えている。それゆえに筆者は自編著を「得と不得」と題した³²⁾。

青洲の医学の金言は「活物窮理」であり、「内外合一」はそのための条件である。「内外合一」と「活物窮理」を結ぶのは「術」である。青洲は「術」を会得するためには自覚して先輩の技を観察し会得することを門人に求めた。

参考文献および注

- 1) 松木明知。華岡青洲研究の新展開。東京：真興交易医書出版部；2013。p.45-55。
- 2) 松木明知。華岡青洲と麻沸散—麻沸散をめぐる謎—。東京：真興交易医書出版部；2006。p.228-9。

- 3) Matsuki A. *Seishu Hanaoka and His Medicine — A Japanese Pioneer of Anesthesia and Surgery —*. Hiroaki: Hiroaki University Press; 2011. p. 174–6.
- 4) 文献 1. p. 83–95.
- 5) 河内全節編 (今村 亮補注). 日本医道沿革考. 東京: 今村 亮; 1885. p. 59–60.
- 6) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京: 吐鳳堂; 1923. p. 19.
- 7) 関場不二彦. 西医学東漸史話 (巻下). 東京: 吐鳳堂; 1933. p. 219.
- 8) 大島蘭三郎. 明治前日本外科史. 日本学士院日本科学史刊行会編. 明治前日本医学史 (第4巻). 東京: 日本学術振興会; 1964. p. 808.
- 9) 森 慶三, 市原 硬, 竹林 弘編. 医聖華岡青洲. 那賀: 医聖華岡青洲先生顕彰会; 1964. p. 14–7.
- 10) 藤野恒三郎. 日本近代医学の歩み. 東京: 講談社; 1974. p. 173.
- 11) 宗田 一. 図説日本医療文化史. 京都: 思文閣出版; 1989. p. 232.
- 12) 医聖華岡青洲展実行委員会編. 医聖華岡青洲展. 那賀: 医聖華岡青洲展実行委員会; 1992. p. 31.
- 13) 和歌山県立博物館編. 図録 特別展華岡青洲の医塾春林軒と合水堂. 和歌山: 和歌山市立博物館; 2012. p. 42.
- 14) 文献 6. 呉の「序」の後に記載.
- 15) 文献 1. p. 83–90.
- 16) 李 樾. 医学入門 (小曾戸 洋, 真柳 誠編. 和刻漢籍医書集成 第9輯). 東京: エンタプライズ; 1990. p. 577.
- 17) 華岡青洲. 燈火医談 後篇. 大塚敬節, 矢数道明編. 近世漢方医学書集成 29 (華岡青洲一). 東京: 名著出版; 1980. p. 383.
- 18) 文献 6. p. 19.
- 19) 文献 17. p. 410.
- 20) 文献 6. p. 123–54.
- 21) 本間玄調. 続瘍科秘録 (巻一). 1859.
- 22) 「関防印」は書画の右肩に押されている印で, そこから始まることを示し, 表装の際, そこから左へ切り込むのを防いだ. 款防印, 引首印ともいう.
- 23) 本間玄調. 内科秘録 (巻一). 1864.
- 24) 浅田宗伯. 先哲医話. 東京: 松山良禎; 1880. 64丁表.
- 25) 市古貞次, 堤 精二, 大曾根章介, 堀内秀晃, 益田 宗, 篠原昭二他編. 国書人名事典 (第五巻). 東京: 岩波書店; 1999. p. 372.
- 管見によれば, 江戸時代後期に「拙軒」を称した人物は幕府奥外科の「村山伯元」(1832–1893)ただ一人である. しかしこれを以て割注の「拙軒」を直ちに村山伯元であると即断することは出来ない. また村山の名前を「春林軒門人録」の中に見出すことも出来ない. 伯元は「海防彙議」の編纂者として知られる塩田順庵 (1805–1871) の次子として1832年に生まれ, 後に幕府の外科医法眼村山自伯の養子になった. 塩田姓の名前も「春林軒門人録」には披見されない. 塩田は1806年に春林軒に入門した加賀・金沢の宮河順達 (白峰) の息である. したがって拙軒村山伯元は宮河順達の孫に当たる. 杉田玄白は宮河の仲介によって青洲から麻沸散の伝授を受け, 玄白の息立卿はそれを用いて乳癌手術を行った. (宮河の後は塩田の弟養源が継いだ, その裔は関東大震災で絶家となったという. (阿部竜夫. 塩田順庵と海防彙議. 函館: 無風帯社; 1951. p. 7.) 村山伯元については「ウィリアム・モートンのエーテル麻酔を見た幕末の日本人医師たち」(麻酔 2005; 54: 202–8.) の中で言及し, 拙著にも記載した. (麻酔科学の源流. 東京: 真興交易医書出版部; 2006. p. 198–207.)
- 26) 文献 24. 64丁表と裏.
- 27) 文献 17. p. 382.
- 28) 松木明知. 華岡青洲の著書出版に対する態度. 知られざる日本麻酔科学史のエピソード (戦前篇). 東京: 真興交易医書出版部; 2016. p. 90–5.
- 29) 文献 6. p. 386.
- 30) 文献 1. p. 49–50.
- 「華岡青洲墓誌銘」に「吾術得于心而応于手. 口不能言筆不能書. 能視者在領会之耳」とあり, 本文中に示したように佐藤持敬は「華岡氏遺書目録」に同様な文章を示している. (文献 4. p. 386.)
- 31) 文献 6. p. 442–3.
- 32) 松木明知編. 得と不得. 弘前: 松木明知; 1991.

The Four Chinese Characters of *Katsubutsu Kyuri* Express the Maxim Chosen by Seishu Hanaoka

Akitomo MATSUKI

Department of Anesthesiology, Hirosaki University Graduate School of Medicine

Koko Niida composed an epitaph for Seishu Hanaoka in 1836 and in it he employed a phrase consisting of eight Chinese characters to describe Hanaoka's medicine. The phrase reads *Naigai Goitsu Katsubutsu Kyuri*. Since then, the phrase has prevailed as Hanaoka's motto, even among lay people as well as medical historians. Although there are scrolls written by Hanaoka showing the four Chinese characters of *Katsubutsu Kyuri*, no calligraphy including the four Chinese characters of *Naigai Goitsu* is extant. Gencho Honma, one of the leading disciples of Hanaoka and who published *Zoku Yoka Hiroku* in 1859, mentioned in the preface that the phrase *Katsubutsu Kyuri* was the maxim that Hanaoka proposed. Considering these facts, the phrase *Katsubutsu Kyuri* is the very maxim chosen by Hanaoka. He appreciated the significance of skillfulness in the practice of surgery, which was difficult to acquire by reading books and listening to lectures. One of his important phrases, which reads *Toku to Futoku wa Sonohito ni Ari* in seven Chinese characters, is discussed, regarding how to be adept at technical skills in the practice of surgery.

Key words: Seishu Hanaoka, Koko Niida, Gencho Honma, maxim, *Katsubutsu Kyuri*